広島大学　学部・附属学校共同研究機構研究紀要
〈第36号　2008. 3〉

ユニバーサルシティズンシップを育む 国際コミュニケーション学習のあり方を求めて－２－

村上　直子　簑島　隆　松尾　砂織　大和　浩子
風呂　和志　八澤　聡　岡　芳香　三田　幸司
加藤　秀雄　谷川　佳万　小早川善伸　長野　由知
掛　志穂　洲濱美由紀　久原　有貴　深澤　清治
平川　幸子　長松　正康　山本　透

１．はじめに

広島大学附属三原幼稚園・小学校・中学校（以下本学園）が掲げている「三原学園プラン」の特質の第１として挙げている21世紀型学力の１つが，国際的コミュニケーション能力である。本学園では，この国際的コミュニケーション能力を「確かな語学力を基に，様々なメディアを駆使して多文化を理解したり，人々と国際的にコミュニケーションしたりする力」と定義している。この力を育む研究を進めるために，2006年度から新たに国際コミュニケーション学習開発部会（以下本部会）を立ち上げた。本部会を立ち上げるにあたっては，これまで過去３年間実施してきた「国際交流学習開発部会」と「マルチメディア学習開発部会」の２つの部会における研究成果が基になっている。部会の設立に伴って，これまで領域として進めてきた学習内容を，2006年度からは教科として位置づけ，国際交流学習とマルチメディア学習を発展融合させた国際コミュニケーション科を設立した。本研究は，「国際的コミュニケーション能力」を育むプロセスや方法を，国際コミュニケーション科のカリキュラム開発，授業実践，カリキュラム評価を通して明らかにしていくことを目的としている。

２．昨年度までの研究経緯と今年度の展望

これまでの研究から「直接的交流」と「間接的交流」というコミュニケーションのあり方が国際コミュニケーション学習における大事な視点であると考える。21世紀を生きる子どもたちが自国の文化を大切にしながら他国の文化を尊重しつつ他国との好ましい関係を構築していく未来を想定した時，直接的交流と間接的交流の２つの視点は欠かせないものである。以下に少し詳しく述べる。

実際に会ってその場の雰囲気までをも共有しながらフェイス・トゥ・フェイスで交流する中で，考え方の違いや感じ方の違いを克服し，好ましい関係を構築していこうという意欲が培われていくことには間違いはない。しかし，そのようなフェイス・トゥ・フェイスの交流を日常的に行うことは大変に難しいのも事実である。多くの場合，他国の情報を得たり情報の交換を図ったりする場合には情報交換のためのツール＝メディアが介在する。メディアの種類によって，どのように発信・受信をするかを考えることなしに交流学習は成り立たない。よって，直接的交流においても間接的交流においても「何をコミュニケーションしていくか」「誰とコミュニケーションしていくか」という視点を大切にしながら，その意欲とスキルを総合的に子どもたちに身につけさせていくべきである。つまり国際的コミュニケーション能力を育むための学習では，どちらかにかたよった内容ではなく，直接・間接両方の視点をもった学習内容を構築していくことが肝要であると考えた。そのためにも融合的な学習内容を研究開発していく必要がある。

昨年度はこの融合的な学習の単元開発，試行およびテキストの作成を試みた。今年度は，それらをカリキュラム化したものを年間通して実施するだけでなく，カリキュラムを評価することを通して，その有効性を吟味することを目的としている。

Naoko Murakami, Takashi Minoshima, Saori Matsuo, Hiroko Yamato, Kazushi Furo, Satoshi Yazawa, Yoshika Oka, Koji Sanda, Hideo Kato, Yoshikazu Tanigawa, Yoshinobu Kobayakawa, Yoshitomo Nagano, Shiho Kake, Miyuki Suhama, Yuki Kuhara, Seiji Fukazawa, Yukiko Hirakawa, Masayasu Nagamatsu, Toru Yamamoto: Seek for Studying in International Communication to Develop Universal Citizenship-2-

3．研究の概要

3．1　教科「国際コミュニケーションの目標」

本部会では教科「国際コミュニケーション」の目標を昨年度より以下のように設定している。

> 様々なメディアを介した体験や直接体験をもとに多文化への理解を深めるとともに，内容や質を吟味した情報を発信したり，相手意識を育んだりすることを通して，積極的・実践的なコミュニケーション能力を育み，世界市民として生きる態度を育成する。

3．2　めざす子ども像

前項の教科目標を基に，3年間ごとの学年ブロックで具体的な「目標」と「めざす子ども像」を下表のように設定した。

なお，幼稚園での「国際コミュニケーション学習」は，これまで研究してきた国際交流の視点とマルチメディアの視点を持った保育を引き続き研究・実践していく。

表1　目標とめざす子ども像

	全体	幼稚園	1～3年	4～6年	7～9年
目標	様々なメディアを介した体験や直接体験をもとに多文化への理解を深めるとともに，内容や質を吟味した情報を発信したり，相手意識を育んだりすることを通して積極的・実践的なコミュニケーション能力を育み，世界市民として生きる態度を育成する。	自国・他国の文化や人，またはさまざまなメディアに出会いながら，かかわることに楽しさや喜びを感じたり，興味や関心をもったことに対して自分なりの方法でかかわろうとしたりする。	自分をとりまく多文化の存在に気付き，直接的・間接的に他者とコミュニケーションをとることでより広く自分以外の存在に目を向け，情報のやりとりにおもしろさを感じることができるようにする。	地域・国・時代など多文化とそれを築いてきた人々に親しみを持って接し，メディアを用いるなど様々な方法で相手の立場を考えながら積極的にコミュニケーションをとる中で，自分の生き方について考えはじめることができるようにする。	メディアの特性を理解し情報を吟味しながら，自国・他国の言葉や他の様々な方法を用いて主体的・積極的に他者とコミュニケーションをとり，ユニバーサルスタンダードの視点をもって自分の生き方を考え，発見することができるようにする。
めざす子ども像	様々なメディアや直接体験を通して多文化を理解するとともに，発信する内容を吟味したり，相手の立場に立って考えたりすることで，他者と豊かなコミュニケーションを築きながら，自分の生き方について深く考え，発見できる子ども	自国・他国の文化や人，また様々なメディアに出会いながら，好奇心とともに，かかわる楽しさや喜びを感じることができる子ども	・身のまわりの多文化に気づき，それらに関わる人々へ関心をもとうとする子ども ・関わる相手への思いをもち，メディアを使って情報のやりとりを楽しむ子ども	・多文化とそれらに関わる人々に親しみをもち，積極的に理解しようとする子ども ・目的意識をもってメディアを選択し，積極的にコミュニケーションをとろうとする子ども	・自国文化と他国文化の差異を理解し，それぞれのよさを尊重しながらよりよい関係の構築を求めて自分の考えを持ち表明しようとする子ども ・メディアの特性を理解し，明確な目的意識と相手意識をもってよりよいコミュニケーションのあり方を考え，積極的に情報を活用しようとする子ども

3．3　つけたい力の推移

これらの具体的な子ども像を実現するためには，どのような力を育むことが必要か議論した。その結果，昨年度は実践・検証を経て整理統合することを前提として，次の7つの力を設定した。

①直接的・間接的に多文化を理解する力
②メディアリテラシーを生かしたコミュニケーション能力
③共生を求めて情報を積極的に活用し発信する力
④外国語を使ったコミュニケーション能力
⑤自国の言葉での自己表現力
⑥情報を科学的に理解する力
⑦情報社会に参画する態度と能力

①②③はそれぞれ国際交流学習とマルチメディア学習が効果的に融合した場合，どのような力を育むことが望めるかを考えて設定したものである。一昨年度までの評価で「身に付いている」とされている「多文化理解」「共生・交流」の力がさらに伸びるよう，マル

チメディア的な「間接交流」「メディアリテラシー」の視点を加えて設定した。

④については，昨年度の学校評価アンケートから，外国語によるコミュニケーションに自信のない子どもほど，共生・交流の自己評価が低いという相関関係があることが明らかになっている。このことからも，外国語を使ったコミュニケーション能力は欠かせない力である。また，⑤はコミュニケーション能力の基本として，昨年度までの研究でも大切にしてきた力である。

⑥⑦はマルチメディア学習においては大切な力であり，この力がさらに伸びるよう，扱う「情報」を国際交流学習とリンクさせながら効果的に育んでいくべきであると考える。

今年度はこれら７つの力の要素を抽出し，国際交流学習の視点とマルチメディア学習の視点を併せ持った融合的な学習内容をさらに研究開発していくために，つけたい力を４つに精選した。図１は，整理統合の過程を示したものである。これら４つの力は２分野からなり，「多文化理解」と「実践的コミュニケーション能力の育成」に分けられる。

①②は，「多文化理解」を中核に据えた学習を通してつけたい力である。子どもたちは，メディアを介した間接交流や直接的に人とかかわる交流学習を通して，自国・他国の人や文化と出会い，かかわる経験を積む。その中で子どもたちは，自分をとりまく多文化の存在に気づき，積極的にコミュニケーションをはかろうとすることで，より広く自分以外の存在に目を向け，やがては自分の生き方や考えを発見することができるようになると考えた。

③④は，「実践的なコミュニケーション能力の育成」の学習を通してつけたい力である。21世紀の社会の中で生きる子どもたちは，様々な国の人々，様々な年代の人々と対話し，豊かな関係を築き挙げていく能力を身につけることが必要となる。具体的には，ボディーランゲージや，絵，写真，文字，英語などを，様々な相手との直接的，間接的なコミュニケーションの場で効果的に活用する力や，それを通して他者の考えを読みとる力が必要であると考えた。

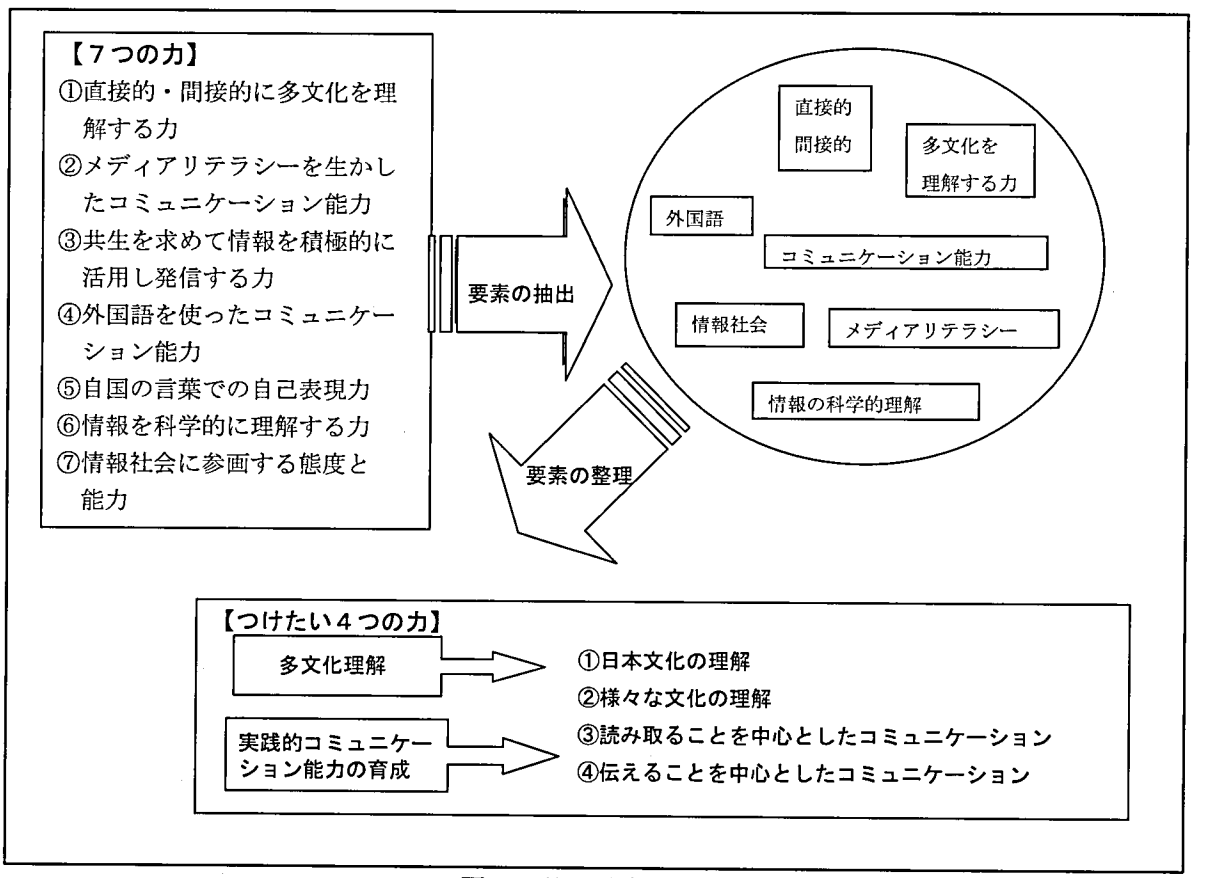


図１　整理統合の過程

４．研究計画

４．１　2006年度の研究より

前項までに述べた目標を実現するため，2006年度に以下の４種の学習内容を考案した。

①自国語・外国語によるコミュニケーションの学習

②情報リテラシーを育む学習

③直接出会う体験を軸とした国際交流学習
④メディアを生かした国際交流学習

これら4種の学習を単元の特性に応じ単独あるいは複合的に構成し，その評価方法の模索に努め，カリキュラムを完成するべく研究を進めた。

4．2　評価の観点について

2006年度の成果や課題を基に，本年度は次の4つの評価の観点を設けた。それらは「世界市民としての関心・意欲・態度」「世界市民としての思考・判断」「世界市民としての表現・技能」「世界市民としての知識・理解」である。この評価の観点は，既存の教科に設定されている4観点を下敷きとしながら，ユニバーサルシティズンシップを身につけた子どものあるべき姿とはどのようなものかを考え，具体的な姿として描き出したものである。「世界市民としての表現・技能」「世界市民としての知識・理解」は日々の授業の中で子どもたちが習得していくべき基礎的事項である。これらをもとに，交流活動を通しながらコミュニケーション手段を選択したり，知識を活用したりすることで，交流に関する課題の解決にむけた力，すなわち「世界市民としての思考・判断」の力が身についていくのである。そしてこれらは，自分を取り巻く社会への関心やコミュニケーションに対する意欲など「世界市民としての関心・意欲・態度」が大切であることが前提となっている。

4．3　3年間の見通し

○第1年次
・新教科「国際コミュニケーション」の構想作成および評価方法の試案作成
・国際交流学習とマルチメディア学習の融合的単元の開発と試行
・2年次の教科課程の編成

○第2年次《本年度》
・「国際コミュニケーション」の幼小中一貫カリキュラムの作成
・国際交流学習とマルチメディア学習の融合的単元の開発と試行
・実践をふまえての評価方法・評価規準の妥当性検証
・テキスト試案の作成

○第3年次
・2年間の研究を検証・修正，幼小中一貫カリキュラムの完成
・評価・評価規準の完成
・テキストの作成

5．実践事例

5．1　幼稚園の事例

（1）国際交流の視点より

①実践にあたって―3歳児（12月）

年間を通して行っている留学生交流で大切にしていることは，いろいろな人の良さに気づき，その良さを認め受け入れようとする気持ちが持てることである。クラスの子どもたちの実態は，留学生などの新しい人との出会いにはまだ不安が見られる。また，一緒に活動するときに不安な気持ちを切り替えることがなかなかできなかったり，不安が長引き次の出会いを躊躇したりする姿もみられていた。そこで，今回の交流では子どもたちにとって楽しい出会いになるよう事前に留学生からのビデオレターを作成し，それを見ることにより出会いを楽しみに待つ雰囲気を作っていった。

②ねらい
・留学生や友だちと一緒にリズム遊びなどをすることにより，いろいろな人や文化との出会いを楽しむ。

③実践例

12月7日（金）　〈交流前日〉

降園前，留学生からのビデオレターを見た。その中には，今度交流するガーナの夫婦（Aさんたち）とその子ども（1歳のBちゃん）が映っている。「Aさんたちのビデオを見ようか」というと，「やったー！」と言う子どもたち。2分ほどのビデオをエンドレスにつないでいる。このビデオを見るのは今日で3日目である。2回目の繰り返しになったとき「かばんを持ってきて帰る支度をしましょう」と言い，ビデオを一時停止にした。ほとんどの子はかばんをとりにいったが，H男がテレビに近づき触っていた。よく見てみると，ちょうどそのときの画面に1歳のBちゃんが映っていた。テレビのBちゃんを撫でていたのだ。するとそれを見ていた子どもたちが5，6人集まり，テレビに映ったBちゃんを触りにきた。「明日，本物に会えるからね」と明日を楽しみにする声かけをして帰った。

12月8日（土）　〈たのしいねー！〉

この日の留学生交流に参加してくれた留学生は，Aさんたち家族とスペインの男性の合計4人だった。事前にビデオレターを見ていたためか，子どもたちは朝から「Aさんたちはまだ？」「Bちゃんは？」と心待ちにしている様子があった。9時過ぎに留学生の姿が見えたとき「Aさんがきた！」と大喜びで保育室の入り口に飛び出していく姿もあった。留学生が「おはようございます！」と元気に挨拶をするとそれに負けないくらい大きな声で「おはようございます！」と返す子どももいた。その後，自分たちの好きなリズムの曲をかけ一緒になって踊るうちに，留学生と顔を見合わ

せたり笑いあったりする姿も出てきた。そんな中，自分の好きな遊びをするのでもなく，留学生と遊ぶのでもなく，保育室のドアのところでずっとこちらの様子をみているH男がいた。一緒に遊びたいがきっかけがつかめないまま時間が過ぎている様子であった。「どうしたの？」と聞いても何も言わない。

【おはようございます】

「遊びたい？」「うん」そこで，Aさんをよんで「この子が一緒に遊びたいといってるのですが」というと，状況を察してくれたようでにこやかに「おはようございます」と座って握手をしてくれた。H男ははにかみながらもとても嬉しそうに「おはよう」と握手をした。

その後，みんなで外国のリズム遊びをした。子どもたちも留学生も満面の笑みで楽しむ姿があった。また，降園前にスペインの絵本を読んでもらった。初めての絵本とスペイン語に興味津々の様子であった。

後日，この日の留学生からの感想のビデオレターを子どもたちに見せた。テレビに映った4人の姿を見て子どもたちは歓喜の声をあげて喜んでいた。

【皆さんありがとう】

④考察

これまでの交流は，前日に「明日は留学生さんが遊びに来てくれますよ」という担任からの簡単な話であった。そのため，子どもたちにとっては具体的な心構えの持ちにくいもので，期待感もあるが不安感も大きい交流となっていた。しかし今回のビデオレターは，子どもたちにとって出会いを楽しみにする意味で，大変効果があった。留学生がくるという言葉での説明だけでなく，動画と声という情報が子どもたちをさらにひきつけたと考えられる。

子どもたちがいろいろな人や文化との出会いを楽しむ様子は，ビデオに映ったBちゃんを撫でる姿や当日留学生の姿が見えただけで保育室を飛び出して会いにいく姿や一緒にリズム遊びを楽しむ姿などから伺える。

H男が保育室の入り口から動けなかったところ，留学生が笑顔で優しく声をかけて握手してくれたことにより，H男は不安の壁を乗り越えることができた。こういう触れ合いを体験することで，いろいろな人の良さに気づき受け入れることができていくのだと感じた。本実践は，今までの実践を見通し今の子どもたちの実態を踏まえた上で，子どもたちや留学生双方にふさわしい出会いはどのようにあるべきか考え，配慮する交流となった。こういう出会いを大切にしながら交流を続けることで，いろいろな人の良さに気づき，その良さを認め受け入れようとする気持ちが持てると感じている。

（2）マルチメディアの視点より

①実践にあたって―4歳児（11月～12月）

幼児期には，五感を通して心を揺さぶられる体験を大事にしていきたいと考えている。また様々なメディアにふれることは，よりいろいろなものや人にかかわる楽しさや喜びを味わうことができると考える。さらにメディアにふれる体験は，たくさんの情報の中からいろいろなものの見方や考え方ができる力も養うことができると考えている。今回は光を通した色の世界をいろいろな方法で感じることで，より豊かな心情を育んだりいろいろな見方ができたりするような実践を行った。

②ねらい

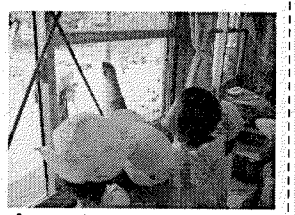
・いろいろな色が綺麗に見える美しさや変化する面白さを味わう。

③実践例

【エピソード1】

保育室の窓にいろいろな色のジェルを貼った。子どもたちは何度も貼ってははがし，はがしては貼って…を繰り返し遊んでいる。ジェルは半透明なものなので，色がついていても向こう側を見ることができる。窓に貼り付けたジェルから向こうの景色を見て「うぁ～，赤く見える」「かえるみたいに見える」など色を通して見る世界に感動する姿が見られた。

1つ1つを貼ることから発展して重ねて貼り付けることに挑戦しはじめた子どもたち。最初は色など関係なく「3個くっついたよ」「僕なんか5個くっつけたんじゃけ～！…あっ，落ちた」など重ねの限界を楽しんでいた。ジェルを重ねて遊んでいるうちに，重ねると色が変化することに気づいた子どもたち。「ピンクと黄色をくっつけたらオレンジに見える」「あっ，黄色と黄緑をくっつけたら黄緑に見えるよ」「オレンジとピンクだったら濃いオレンジ！」など，色が変化することに感動する姿が見られた。


【ここに貼ったらどうなるかな～】

子どもたちが日常の遊びの中で，色を通して見るといつも見ている景色が違って見える驚きを感じたり色を重ねると変化した色が見える面白さを感じたりしている。いろいろな色を組み合わせては様々な色ができることに気づき，感動する姿が見られるようになってきた。

【エピソード２】

子どもたちがこまを作って「見て！こんなの描いたよ」「回ったらね，綺麗なんよ」と保育者や友だちに見せながら遊んでいる。

保育者はこまをみんなに紹介する場を設けた。しかし後ろの子どもは「見えない」と不満をつぶやく。そこで保育者はＯＨＰを用意した。ＯＨＰシートを丸の形に切っておき，それに子どもたちが色をつけて回す。自分のこまがスクリーンに映ることに喜び何度も試す。「映った！」「黄色の線も描いたのに，回ったら黄色が見えなくなった」

【こんな模様にしよう】

「○○ちゃんのすごいね」などスクリーンに映るこまを見ながらつぶやき，感動や発見をかみしめている。その思いに共感する声をかけると子どもたちは益々楽しそうによりいいものを作ろうとする。今までは紙のこまだったため重ねることがなかったので，保育者が意図的にシートを重ねて提示した。すると子どもたちは喜んでいろいろなシートを重ね様々な色や模様に見えるこまを作った。「これとこれを合わせたらどんな風になるのかな」「いっぱい重ねたら，ぐちゃぐちゃになっちゃった」と何度も試行錯誤しながら新たなものができる面白さを味わいながら遊んでいた。

【見てみて，きれいでしょ！】

ＯＨＰシートは光を通して色がとても綺麗であると同時に重ねることもできるので様々な模様ができる楽しさや友だちのと合わせる嬉しさも感じて遊ぶ姿が見られた。またＯＨＰを通して自分が作ったこまをみんなに見てもらえて嬉しそうな表情をする姿も見られた。

④考察

子どもたちは日常生活の中で様々な色に親しんでいる。そこに光を通して色を見ることから色がより綺麗に見えたり組み合わせると違う色に見えたり，回すと色が混ざって見えたりする体験をした。この体験を通して子どもたちは驚きや色の面白さを十分感じることができたのではないだろうか。

またＯＨＰというメディア機器にふれることで，子どもたちは自分が感動したものを保育者や友だちと一緒に見て認めてもらう喜びや友だちのこまを見ることができる喜びも味わっている。ＯＨＰシートだからこそ重ねることができ，個々の思いを生かしながらいろいろな色や模様を楽しめたのではないかと考える。ＯＨＰの映像のように，目の前に見えるものだけでなく目の前にあるものとは違うものが見えることにより，いろいろなものの見方に直接ふれる体験をしたのではなかろうか。このような活動を通して驚いたり喜んだりすることが子どもたちにとってより豊かな心情を育んでいくことにつながると考える。

５．２　小学校の事例

○単 元 名　「世界の国からこんにちは」
○学　　年　３年生
○実施時期　11月～２月
○単元の概要

オーストラリアの小学校とは，iEARN（International Education and Resource Network）を通じて紹介を受け交流を行ってきている。本単元では，オーストラリアの小学校と生活の様子を交流しあい，外国の様子を知り，生活の違いを感じることをねらっている単元である。デジカメ写真やビデオなどは，インターネット上の掲示板を利用して紹介しあうことができる。相手に分かってもらえるような写真を撮ることで，相手意識を持ちながら国際交流していけるものと考える。

○単元の目標

・積極的に外国の生活の様子を知ろうとし，交流を楽しむことができるようにする。
【世界市民としての関心・意欲・態度】
・オーストラリアからの写真や日記などからの情報等を利用し，外国と日本の生活の様子の相違を感じることができるようにする。
【世界市民としての思考・判断】
・相手意識を持ってメディアを活用し，相手に働きかけることができるようにする。
【世界市民としての技能・表現】
・外国の文化や生活の様子は日本と同じところや違うところがあることがわかる。
【世界市民としての知識・理解】

○計画（全24時間）

第１次　自己紹介をしよう。だるまを送ろう。（４時間）
第２次　日本の様子を知らせよう。撮影しよう。（10時間）
　・デジカメで学校生活の様子を撮ろう。
　・フォトストーリーで写真をビデオにしよう。
第３次　外国の様子を知ろう。調べよう。（５時間）
第４次　交流のまとめをしよう。（５時間）

（1）学習の様子について

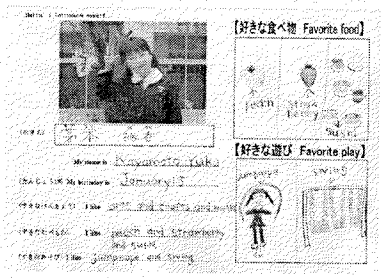
（第1次の様子）

第1次では，iEARNの紹介を受け，オーストラリアの小学校と交流ができるようになったことを知り活動の計画を立てることにした。まずオーストラリアの小学校と交流していくのに，どんなことを知りたいか，どのように交流したいか話し合った。子どもたちは，2年生の時に，オーストラリアの自然の様子や学校の建物の写真などを見ており，何となくはオーストラリアの雰囲気をつかんでいた。しかし，学校にどのように通ってきているのか，どんな学習をしているのか，給食は食べているのか，給食当番はいるのかなど，学校生活の様子について，いろいろな疑問を持っており，交流して生活の様子を知りたい，あるいはこちらの様子も知らせたいという気持ちを強く持っていた。

【オーストラリアの生活について知りたいこと】
～子どもたちの意見より抜粋～
○服装は何を着ているのか。（制服はあるのか。）
○授業はどのような勉強があるのか。（黒板はあるのか，何時間目まであるのか，かけ算は何の段まであるのか，ひっさんの仕方はどのようなのか，習字はあるのか，黒板はあるのか，ランドセルで通学するのか…など）
○学校やクラスの人数，通学の方法，休みの日はいつか。
○食べ物にはどんなものがあるか，給食はあるのか，給食当番がいるのか。
○校舎の様子，ベランダはあるのか。

上記のように，子どもたちはいろいろなことを知りたいと思っていた。その他，学校生活以外のことでは，お祭りにはどのようなものがあるか，町の様子，名物の食べ物，ふだん家でしていることなども知りたいと答えている。中には，実際に会話をしてみたいとか，一緒に授業をしてみたいなどの意見もあった。

次に，自己紹介カードを作ることにした。子どもたち一人ひとりが，自分の顔のデジカメ写真をパソコンで文書に取り込み，紹介カードを作っていった。指導者の作ったフォーマットに従い，英文で書くことにしたが，好きな食べ物や遊びなどの単語の部分だけを和英辞典をひきながら調べて記入していった。また，食べ物や遊びの絵も描いた。



【自己紹介カード】

交流の方法としては，テディベアプロジェクトの企画（iEARN主催）に則って，お互いの学校に人形の留学生を送り，その留学生を主語にした日記を書くことを通して様子を伝え合うことを中心に活動していくことにした。そこで，留学生として様子を伝えていただく人（人形）を何にするか考えた。子どもたちからは，「日本らしい人形なら，三原のダルマがいい」と全会一致でダルマに決定した。

【出発前の留学生のダルマ】

【和英辞典で単語を調べている】

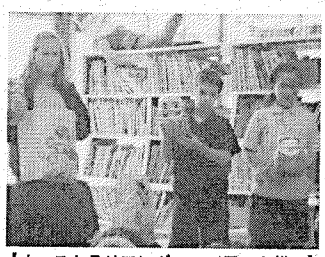
（第2次の様子）

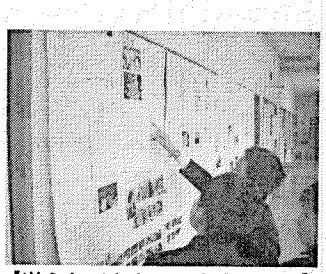
いよいよオーストラリアの小学校との交流が始まった。エアメールでダルマを送りはしたものの，相手校からの留学生や連絡が届かないと，子どもたちはまだ交流しているという実感がないようであった。

オーストラリアから一つの箱が届いた日，箱の中の留学生やお土産を見せると，子どもたちは大歓迎をした。オーストラリアからは，鳥のKookieとカンガルーのSkippyが届いた。

【オーストラリアからの留学生到着】

数日後，日本のダルマが届いたという知らせとともに，箱を開けている様子の写真もメールで添付してもらったので，無事届いたことを子どもたちにもすぐ知らせた。互いに交流をしていくのだという実感がわいた瞬間だった。


【オーストラリアにダルマが届いた様子】


【送られてきた日記を見ている】

毎日，子どもたちは留学生を自宅に連れて帰り，日記を書き始めた。オーストラリアからの日記は日本語に訳し，印刷し掲示した。子どもたちは，英文の中に知っている単語を見つけようとしたり，写真を見て様子を友だちと話したりしている。アニメのキャラクタ

ーや携帯用ゲーム機など，日本と同じものがあると驚いている様子も見られた。

日記を書くことと平行して，学校生活について写真を撮って送り，伝えていくことにした。

子どもたちはいろいろとテーマを考えた。考えたテーマは，「学校での遊びの様子」「給食の様子」「勉強の様子」「校舎や教室の様子」である。まずは，遊びの様子をデジカメで撮って，それを見た。楽しそうに遊んでいる様子がわかる写真であったが，何を写したのかよくわからない，というものもあった。

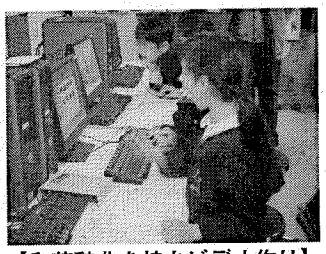
外国の人が見て，様子がよくわかるような写真を撮ろう，というめあてを設定し，再度写真撮影を行った。

【アップで撮った写真】

【全体がわかるように撮った写真】

上の写真のように，撮った写真を見て比較しながら，子どもたちは外国の人に何をしている写真かがわかる撮り方のコツについて考えた。

写真を撮って見ていく中で，写真をビデオのようにしてみると見て楽しいのでやってみたいという児童がいた。ちょうど計画をしていたようにビデオ作りの話題になった。4枚の写真を使ってお話作りをしながら並べるのにちょうどよい手段として，マイクロソフト社のフォトストーリーというソフトを使用することにした。



【和英辞典を持ちビデオ作り】

ビデオ作りのテーマの中で，給食の様子については本校の研究会で公開を行った。「給食の○○の様子が外国の人に伝わるビデオを作ろう」をテーマにして，班ごとに写真を撮り，ビデオ作りを行った。給食を作っている様子，配膳している様子，食べている様子，中には，食材が届くところから調理をし，配膳して口に入るまでを表した班もあった。

見る人のことを考えながら撮影した写真，その写真を使って作ったビデオの作品を比較し，メリットやデメリットについても考えていった。下のような表にまとめていった。

○やっていること（所，物）が写っていること。
○どアップはしない。（顔だけとか）
○カメラ目線にしないこと。自然にうつること。
○いっしゅんをとるには，少し早めにシャッターをおす。
○ぶれていないこと。
○暗い写真にしない。など

	よい所	よくない所
写真	○いつでも見ることができる。(かざることができる) ○ゆっくり見ることができる。 ○いい瞬間の場面を撮ることができる。	○色があせる。 ○カメラ目線になる。 ○外国の人にわからないものが写ることがある。
ビデオ	○自動でいろいろな様子を見ることができる。 ○文字の色や形を変えることができる。 ○写真の順番が様子に合うように変えることができる。 ○写真をかえるときの変化をカスタマイズすることができる。 ○短時間でよくわかる。楽しい。	○じっくり見ることができない。 ○パソコンがないと見ることができない。 ○写真より作り方がむずかしい。 ○写真より作るのに時間がかかる。

成果と課題

写真の撮り方では，何をしている様子の写真なのかがわかるように，受け取り方を考えた撮影の仕方を考えることができた。ビデオ作りでは，4枚の写真を並べ，写真の順序性を考えたお話を作ったり，和英辞典で言葉をひきながら簡単な英単語を交えて表したりすることができたことで，見てもらう人のことを考えた作品作りをすることができた。学校生活の写真や作ったビデオ作品をオーストラリアの人に見てもらい，感想交流に生かしていきたい。

5．3　中学校の事例

○単 元 名　「エスコート IN みはら」
○学　　年　8年生
○実施時期　平成18年4月～18年10月
○単元の概要

本単元は，自分たちの故郷について学び，異文化を持つ外国の方に実際に案内するという学習活動である。まず，ふるさと「三原」を知るために，地域のガイドボランティアグループの方と一緒に歩き，実際に自分の目で確かめながら地理的知識・歴史的知識を深めていく。そして，外国の方に自分たちの地域三原を，どのように伝えたらいいかを考え，工夫を重ね，エスコートしていくという内容である。自分が育った地域，もしくは自分の通っている学校がある地域をより深く知り，それを他の地域から来た人たちに発信する力を

つけることも，国や文化が違う人たちとコミュニケーションをとる上で大切な要素だと考えられる。

○単元の目標

・外国の人と積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を養うことができるようにする。
【世界市民としての関心・意欲・態度】

・文化の違いを理解し，感謝の思いを発信することに喜びを感じながらコミュニケーションに関する継続的な意欲を持つ。【世界市民としての思考・判断】

・学習を通しての思いや閑雅を自分の言葉でまとめ，相手意識を持ちながら自分の伝えたいことを表現できるようにする。【世界市民としての表現・技能】

・今までの交流学習や地域学習で出会う人たちとの経験や得た知識を生かしながら，留学生に自分たちの町を案内していく中で，知識をより深め，文化の違いを理解する。【世界市民としての知識・理解】

○計画（全30時間）

第１次　三原について知ろう　（２時間）
第２次　実際にコースめぐりをしよう　（６時間）
第３次　コーステキストを作ろう　（８時間）
第４次　コースの練習と調整　（６時間）
第５次　エスコート本番　（２時間）
第６次　振り返りとまとめ　（６時間）

（１）学習の様子

（第１次，２次の様子）

第１次で，生徒たちには，自分たちのふるさとである三原をよく知り，自分たちと異なる文化や国から来た留学生さんたちに三原を紹介しようという学習内容を示した。昨年度も留学生さんたちを招聘して出身国の様子や文化について交流したが，自分たちの一番身近な地域である三原について紹介することは今まであまり経験のないことだった。今回，自分たちの地域を紹介し，伝えていくには，まず自分たち自身が地域についての深い知識が必要だということを確認した。そこで，三原をボランティアでガイドしている団体「アゼリアガイド」の方たちの協力を得て，三原の歴史や地理について学習していった。さらに，郊外に出て，実際に現存する建物や地形などを見学しながら，留学生の人たちに興味を持ってもらえそうな所を選んでいった。

アゼリアさんのガイドを受ける日は，ほんとうに暑くて，みんな初めは，「あつい，めんどい，たいぎい，何でこんなことをせんとイケンのん！」っと，みんなのやる気を感じることが出来ませんでした。でも，本番が近づくにつれて，留学生さんのことを真剣に考えだしてからは，アゼリアさんの話をしっかりと聞いて，まずは自分達が三原について学ぼうと真剣に取り組んでいきました。

郊外学習の時期が５月下旬～６月であった。当初は上のような感想を持つ生徒も多かったが，ふだん歩いている町についての新たな発見や，ガイドの方たちの姿勢などに触れ，だんだんと学習に意欲的な生徒が増えてきたように思う。

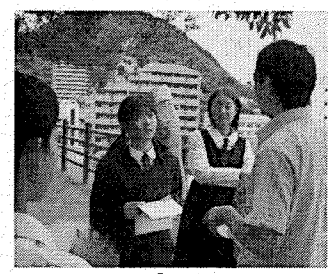
【ガイドを受ける生徒たち】

（第３次，４次の様子）

留学生の方をエスコートしていくルートをグループで確認し，ポイントごとのガイドテキストを作成した。初めのほうは三原について得た知識などをそのまま説明していたため，難解で，伝わりにくい文であった。エスコートの対象が，留学生さんであるという相手意識を毎時間持たせる必要があった。三原のことをほとんど知らないということは話す内容のどういうことに配慮すべきか，平易な日本語とはどういう言葉であるか，を確認させ，説明内容を推敲していった。知り得た全ての知識を話すより，伝えたい内容を絞り，自分に関連する話題や興味のあることを取り入れた方が，より身近に感じて，何より話しやすいと言うことに気づき始めた。留学生さんにどこまで理解してもらえるか，ということを期待しながら，テキスト作りを進めていった。その後，郊外に出てリハーサルを行った。グループごとに出かけ，本番を想定して話してみた。声の大きさ，ジェスチャーをつける，話す速度などに気をつけながら自分でつくったオリジナルテキストを声にだした。「アゼリアガイド」のメンバーの方々に同行してもらい，アドバイスを受けた。その後，若干の調整をしながら，テキストを完成させた。

（第５次の様子）

本番当日は，三原城趾付近の広場に集合し，留学生さんを待つこととなった。相手の名前と出身国しか把



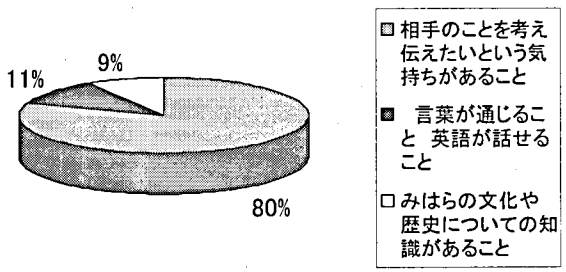
【留学生さんたちに三原を案内する】

握しておらず，不安と緊張の中での対面となった。スムーズにお互いの自己紹介をしてエスコートを始めるグループもいれば，日本語でなかなか通じない相手に苦労しているという一場面も見られた。約2時間という短い交流時間の中ではあったが，生徒たちは，自分たちの学習してきたことを伝えるにはどうしたらよいか，試行錯誤しながら町を案内していた。

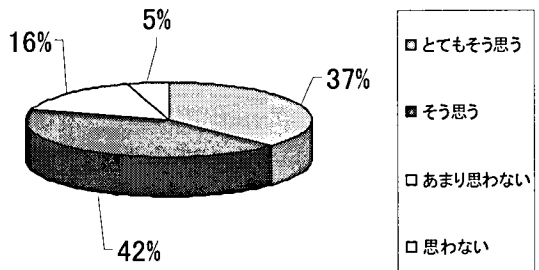
(第6次の様子)

「エスコート IN みはら」を体験した後，生徒たちは次のように感想を述べている。

> 今回のガイドで，みんなの中には，言葉が通じること・三原の文化や歴史についての知識があることが大切だと感じた仲間もいたようです。でも，ぼくは何より伝えたいという気持ちが一番大切だと感じました。僕は，ガイドのときに，決して言葉が通じなかったとしても，伝えようという気持ちだけは失いませんでした。言葉が通じていなくても，ジェスチャーや電子辞書などを使って，ガイドをしました。もし，あのときに伝えようとする気持ちを失っていたら，留学生さんをガイドすることは出来なかったと思います。



(外国の方とコミュニケーションを取る上で大切なことは何だろう)



(留学生さんとコミュニケーションを取ることができた)

感想や，アンケートからもわかるように，生徒たちは，言葉よりも，まずは相手に伝えたいという意欲や姿勢が大事だと実感している。ジェスチャーや，表情，しぐさなどの言葉以外の動作を駆使して伝えようとしている様子がよくわかった。そして，その上で自分たちの情報を正確に伝えるためには，言語力を高めていくことは大事だと感じている。

(成果と課題)

生徒たちは，外国の方をエスコートするために地域を改めて学習し直すことによって，いままで知らなかった地域の歴史や文化の良さに触れることができた。生徒たちは，今までに留学生さんたちとの出会いを楽しみ，文化の違いなどを感じながら，交流の難しさも体験したと思われる。12月には修学旅行でアメリカ人家庭と半日を過ごすHome Visitを体験したが，ここでも持参した地域の写真とともに，三原を紹介した。まずは伝えたい気持ちを持ち，英語やジェスチャー，笑顔も使いながら異文化を持つ人たちとの試行錯誤のコミュニケーションを楽しむ体験を続けたい。

6．今後の展望と課題

昨年度に引き続き，単元開発を行った結果，コミュニケーションを核とした単元・題材開発を進めることができた。また，これまで開発した単元を継続して行うとともに，その評価方法の確立に向けて，一定の成果を得たと考えている。以下は，今年開発した例である。

小3：世界の国からこんにちは

中2：広島大学の留学生を対象とした三原エスコートプロジェクト

今後は，開発した単元・題材の継続実施と同時に，評価方法の確立が求められる。本学園で行っている評価方法の具体例としては，子どもたちの変容を書きためることによって評価するエピソード評価，ルーブリックを作成して評価するルーブリック評価などである。しかしながら，実施した単元の有効性や継続性の検証は不十分であるのが現状である。国際コミュニケーション科が教科である以上，評価方法の確立に向けて，研究と検証を進めていく必要がある。

引用（参考）文献

1）広島大学附属三原学園編著（2005）「21世紀型“読み．書き．算”カリキュラムの開発」，pp. 26－69.

2）大和浩子，松尾砂織，簑島隆，居川あゆ子，桑田一也，風呂和志，村上直子，山＃裕昌，岡芳香，三田幸司，加藤秀雄，神重修治，杉川千草，谷川佳万，徳本光哉，藤井雅洋，池田明子，洲濱美由紀，久原有貴，深澤清治，平川幸子，長松正康，山本透（2007）「ユニバーサルシティズンシップを育む国際コミュニケーション学習のあり方を求めて－1－」，広島大学学部・附属学校共同研究機構研究紀要，第35号，2007，pp. 101－110.